

<酒田特別支援学校の実践について>

レポートタイトル「作業学習 木工班 木工製品製作組立て補助具の作成」

1 実践にあたって

本校知的障がい教育部高等部は、週10時間の作業学習を設けている。作業学習では28名の生徒が農芸班、窯業班、家政班、木工班に分かれて活動している。本報告は、木工班で行っている木工製品製作の実践である。木工製品を製作するときに、組立てを正確に速く行う為の補助具を製作し活用することで、より正確な製品の組み立てができ、完成した時の満足感を高め作業に対する意欲を引き出したいと考えた。

2 活動より

部品を釘で接合する際に、部品を所定の位置に合わせて固定するだけで正確な組み合わせになる補助具を作成した。組立て担当の生徒は、指先の感覚だけを頼りに、ずれないように押さえて組立てるよりも、安定して正確に行えるようになり、ミスすることへの不安が減って、上手く作業ができる自信もついたように感じる。また、部品のセット位置を視覚的に理解できるような図を補助具に書き込むことで、生徒が自分で取り組める工程を増やすことにもつながった。



フリーボックス (大)

ミニチェア



フリーボックス (小)

スマホ立て

3 まとめ

この実践を行うことで、より正確に組み立てを行うことができ、組み立てを終えたときの満足感が高まり、作業に対する意欲を引き出すために効果的な手立てとなった。

<山形養護学校の実践について>

レポートタイトル「作業クラフト班 メッセージカードの製作販売活動」

1 実践にあたって

本校高等部の重複障がい学級では毎日2時間の作業学習が設定されており、今年度は14名の生徒が布加工班とクラフト班に分かれて作業を行っている。クラフト班のメッセージカードの製作販売活動では、病状や障がいの重い生徒が、少ない支援で作業できることをねらいの一つとしている。生徒達の卒業後の進路先としては福祉事業所の利用が多いが、各事業所ではそれぞれが製品作りや手工芸など特徴的な軽作業を活動の中心としている。生徒たちが作業学習を通して気持ちの安定を図り、働くことの意義を学んで進路選択していけるようにしたい。そのためにも、生徒の実態に合った補助具の開発や、環境設定等の工夫は、指導者にとって重要な課題である。

2 活動より

(1) 生徒A 紙の裁断、模様の貼り付け

Aは、集中力が持続しなかったが、ついたてを使用して場所を区切ったことで、集中して紙の裁断に取り組む事ができた。また、立ち位置の目印、裁断機の紙合わせの目印をつけ、刃を常に切れる状態にしておくことで、本生徒は安定して50分間一人で作業に取り組むことができていた。

(2) 生徒B 型抜き ステンシル

車椅子で常に介助の必要な生徒Bは、自立活動を主とする教育課程であるが、型抜きの補助具があれば、少しの支援で型抜きができる。自立活動として製作の工程を担うことができた。

3 まとめ

今回は生徒2人の活動の改善例を紹介したが、そのほかに、ステンシルの補助具、作業台やイスの改善、枚数や個数の生徒用チェック表など、生徒の実態に合わせて道具や環境設定を工夫することで、生徒は「仕事できた」「楽しい」「もっとしたい」という意欲を表す事ができた。バザーでは堂々と販売活動をする姿がみられた。